

仏の心を心として

我等の目標

- その一……………
- その二……………
- その三……………
- その四……………
- その五……………

我等の目標 その五

「私どもは、仏の心を心として、しっかりとした団結の上に立ち、社会に根強く働きかけて、仏の心を中心にした社会を造り上げましょう。」

当然の使命

「私どもは、仏の心を心として、全ての人をこの道にお誘いして、歓びをお分かち致しましょう。」

それが第四の目標でありました。この「道」にお誘いして、この「歓び」を分かつ、それは救われて喜び生きる者の当然の使命であります。

世にはあまりにも多くの人が、道を失い、暗に迷い、苦悩に陥り、人生に泣いておられます。しかもそれが、正しい道を聞き、み法を求めて、金剛不壊の大信念に生きることによつてのみ、永遠に解決されるのであることを知らずに。

私どもは、暗い人生の片隅で、すでに一家何人、心中まで企てた人が、正法を聞き、如来に生きて更生転回、今では幸福なる今日を生きぬいているのを知っています。

かつては、家庭の、社会の暗の中心だった人が、今では人生浄化の源泉にふれて、世に尊ばれている幾多の人を知っています。

あるいは又、悪魔的英雄主義的な存在として多くの人を苦しめ悩ましていた人が、大懺悔の後、今では人に尊敬せられるようになった事実も沢山あります。

そうした尊い事実の全てが、皆、人から人に「この道にお誘いして、歓びを別ちたい」との念願の動きによつて出現してきたのであります。

よく求める人、よく聞く人、はつきりと生活する人は、必ず、よくはたらきかける人、よく働かす人であります。涙の谷に沈める人が道に生き、歓びに生きるに至ったほど有難いことはありません。

団結

「仏の心を心として生きる」人が集まった時、肉親の親族にも増した同心一体の結ばれが出来て来ます。そこに真実の団結が生まれます。

憶うに、欲望による集まりはついに強力であることは出来ません。欲望は、人によつて違つてゐるし、永續性がないからであります。欲望は、個人主義的なものであり、利己的なものであります。どうして真実の団結が成就しましょうぞ。

仏の心を心とする者の集まりは、信によつて集まるのであります。信は、善悪を出た第三天地であり、賢愚を超えた第三世界であり、男女を問わぬ第三天地であり、貴賤同族を越えた第三世界であります。誰の中をも同一の如来の信が貫流します。私どもは唯、この一切を超えたる如来の信によつてのみ、同心一体となることが出来るのであります。故に我等の集いには、この第三世界をもつて来るべきであります。

分裂

上は大政党から下は一家庭まで、分裂したり、離れたりするものは、必ず、感情問題か、私利私欲が原因であります。私利私欲は如来の信ではなく、悪感情も如来の信にそむくものであります。小さい感情が大きな隔たりを生み、大きな欲が相互の密接な情義を裏切ります。

悪感情や、私利私欲は、それがどれほど形を変えようと、人を分裂離反せしむるものであるのに反して、如来の信には、これを徹底すればするほど、一体へ、団結へ、とつれてゆかずにはおかない必然性があります。

個人生活の尊重

我が光明団全陣営においても、求道熱の盛んである所は、団結もまた強固であり、² 団結の出来た処は社会に働きかける力も強力であります。

そこで私どもは第五の目標として

「私どもは、仏の心を心として、しつかりとした団結の上に立ち、社会に根強く働きかけて・・・」と掲げずにはられません。

しかしよほど注意しなくてはならぬことは「社会に根強く働きかける」ということについてであります。それは個人の生活、個人の歩みを決して軽視するのではないということであります。否、個人の生活こそ、最も尊ばれなくてはなりません。

宗教の世界には他の世界に持たない特徴があります。即ち、何れの世界よりも、我々というものの上に深い世界を見出し、深い内観を要求し、求道と生活を求めます。したがつて、伝道や事業や説教や、そうしたことは末の末のことであつて、それよりも、その人が如何に合掌して如来の教法を聞き生活したかが最第一の必要事であり、肝要第一義であります。これを忘れては何ものもありません。

社会に働きかけることのために、自らの求道も生活も眼中になく、天晴れ、物識り、智者、等々になりすまして、如何に天下にむかつて怒号したところで、それは悲惨滑稽なる噴飯事であります。

個人的に見れば、我執、我慢、我欲、放蕩無頼の者が集まつて「仏教は無我イズムである。」と言つた所で、個人、個人が無我の生活者でない時には何にもなりません。そこで我等は一生を通じて聞法求道、我自身の尊重、精進、創造不退の歩みを続けねばなりません。

自然の力

しかしてそこに自然に生まれて来る團結、その團結の中から生まれて来る光と力とが、任運無作に、自然に社会に根強く働きかけて出るのでなくてはなりません。

一時のはずみや、香具師的、投機的気分や、事業熱や、英雄主義や、売名や、そうした一切の毒素を、如来の智慧光によって克服して「仏の心を心とした」働きかけでなくてはなりません。

私どもの歩みは、一時に、早急に、如何に世の中からやんやともてはやされたかというようなことが問題でなくて、どれだけ深く、真実に歩んだかということが問題なのであります。

私どもの「仏の心を心として」の願いは初であると共に終であります。仏の心を心とする者の集まって生きる家庭、家庭の中でまず仏の心を心として生きさせて頂きましょう。更に私どものそれぞれの社会的役割の中で、仏の心を心として生きさせて頂きましょう。やがてそれが拡大されて、仏の心を心とした社会が生まれ、国家が成就することあります。

重ねて言う

私は、「我等の目標」五ヶ条について、語つて来ました。それは私が何時も何時も考えていることであり、生活していることであり、生活しようとすることであります。しかして、

(一) 求道不退の願いも、

(二) 至心精進の信の生活も、

(三) 真実愛の問題も、

(四) 救われた者の使命も、

(五) 社会生活の基調も、

全て「仏の心を心として」の成り立つことを述べました。

私は重ねて「おい兄弟、お互いに仏の心を心として生きてゆこう。」と言わずにはいられません。

同胞と共に

天言地声

「汝は今

大きく大きく動こうとする

だが一寸まで しかして考えよ

何のために動くのか

どんな心が根底で動くのか

如何なる手段を取ろうとするのか

その十分間の沈黙が

やがての日の千里のまちがいを正す。」

今日、私が同胞に送る精一ぱいの心であります。

気をつけても気をつけても、後になって見れば失敗だらけであり、後悔のみ多いこととあります。それに気もつけず、考えもしないでため行つたのでは、どんな恐ろしいことを仕出かすかわかりません。同胞に捧げると共に、私が私に言つて聞かせる言葉であります。

手紙一本でも

お母さん、貴女は今、娘御の処へ手紙を書こうとしていられますか。一体、何のためにお書きになりましたか。どんな心でお書きになりましたか。それを書いて娘御に何をさせようというのですか。一寸その御手紙を見せて頂きます。なるほど、要点はこうですね。

一、多忙な、やかましい家庭で、お前が疲れるのも無理はない。

二、先方の姑や、夫のやり方は随分悪い。

三、ついては父が病だと電報を打つて呼んでやるからその気でおれ。

と書いてありますね。かわいい娘御のことです。ごもつともです。しかし考えて下さい。貴女は一度は、先方の夫や、姑等の言い分も聞きましたか、娘御の生活も調査しましたか。昔の武士の家庭では、嫁ぐ時は九寸五分を渡して、親郷に甘えて、自分の生き方の不徹底さを許されようとする迷路を封じました。これ冷たきに似て、真の 4 慈悲であります。

貴女のような態度では、娘御の将来も気使われます。調査してごらん、貴女の娘御は、先方で親里を笠に着て、一寸大きな音がしても「郷にかえる」を連発しているに違いありません。もし偽の電報を打つて、一時を可愛がるというようなことをくり返されたのでは、娘御は一生軟鉄のまままで苦しみに出会う度に泣く不幸な人になります。考えてその御手紙を書きかえて下さい。今の貴女の心は、念仏の心ではなくて、先方を恨む心と、娘御への愛着の心であります。

十分間

一家五人、食うに困つて五人心中をしようとする男が、今一度静かに考えてくれたら、死ななくてもよかつたかも知れない。

わずかな言いがかりで、腹をたて相手を刺殺した男が、牢獄の中で流す涙、その中に流れるものが凶行を演ずる前にちらつと輝いていたら、自他共に助かつたであります。ましよう。

瞋恚、怨み、嫉妬、貪欲、等々、大きく動く前に、まず静かに坐れ、眼を閉じよ。そして静かに念仏申せ。決して、瞋恚の心に乗つてはなりません。時には、唯言葉一つが、取りかえしのつかぬ大問題をおこします。ましてや、平静の行動と違つて、大きく動くこうとする時には、如何に苦しくても、決して軽率に動いてはなりません。後に

なつて、とりかえしのつかぬことになつてしまひます。わずかに十分間の沈黙が一生を支配します。

大聖の信境

人間が生きているのか、南無阿弥陀仏が生きておるのか。

全身の細胞の一つ一つすらが、如来によつて生きている大聖の生きる領域を憶う。

『安心決定抄』に曰く、

「念仏三昧において、信心決定せん人は、身も南無阿弥陀仏、心も南無阿弥陀仏なりと思ふべきなり。人の身をば地水火風の四大寄り合いて成ず。小乗には極微の所成といえり。身を極微に摧きて見るとも報仏の功德の染まぬ所はあるべからず。されば機法一体の身も南無阿弥陀仏なり。心は煩惱、随煩惱等具足せり、刹那々に生滅す。心を刹那に千割りて見るとも、弥陀の願行の遍ぜぬ所なければ、機法一体にして心も南無阿弥陀仏なり。（中略）吾等が色、心二法（肉体と精神）、三業（身、口、意のはたらき）、四威儀（行、住、坐、臥）すべて報仏の功德の至らぬ所なれば、南無の機（信心）と阿弥陀仏の片時も離るゝ事なければ、念々みな南無阿弥陀仏なり。されば出づる息、入る息も仏の功德を離るゝ時分なければ、みな南無阿弥陀仏の体なり。縛日羅冒地といひし人は、常水觀をなしゝかば、心に引かれて身も一つの池となりき。その法にそみぬれば、色心二法それになりかえることなし。」

幾度読んでも飽かぬ大文字であります。バザラボヂという人は、何時も何時も水のことばかり観じていたので、身も遂に池となつてしまつたとは、面白い譬えであります。

如何なる大聖といへども、私どもと同じく煩惱を持つていたことに違いありません。火は熱く、氷は冷たく、喜怒哀楽の情も、人間的な欲望も全て持ちつゝも、しかも大聖たる所以は、その全体に如来が生きてましましたのであります。

炭に火のおこりつきたるが如く、その全身全霊が聖なる如来の血に生かされ、苦悩の中にいつつも苦悩を忍び、煩惱の中にいつつも煩惱を超えて、不滅の光と悦びに感謝し、合掌し、懺悔して、本願に生きてゆく処に、大聖の生きた領域に通ずる道があります。

如来に底がない限り、我等の歩みにもまた底がありません。

光悦のみ座

正しい宗教を失つた現代人たちは、高い高い文明の中で、高等な教育を受け、多くの富と時間とを持ちつつ、いよいよ赤裸々に、露骨に、本能の享樂に醜い相をおどらしています。宗教を無視した教育の罪であります。

ただれた世相をじつと凝視めつつ、私は黙つて聖者の信境に合掌して限りなく天真の法を聞き、教を受け、典を生きて、徳を得ん。

智慧光によつて眼を内に開かれ

煩惱の相を諦観して、地獄一定必墮無間、その無功德底に合掌して、念仏する。

我生きるに非ず、如来我にあつて生き給う。

如来の大悲は、我が寿命

如来の願力は、我が願力

如来の信力は、我が信力

如来の智慧は、我が光明

如来の功德は、我が功德

この如来金剛の聖座に安住して、寄せてはかえす苦悩を忍受せん。

念願

噫。「仏の心を心として」 生きる吾等の幸、尊重すべき哉。感謝すべき哉。

同胞よ。共に同心に「仏の心を心として」 生きぬいて行こう。永遠に不退転に、この大道を行歩してたじろがず、世の底に光る人こそ、地位を超え、男女を超え、善悪を超え、賢愚を超えて、永遠に我が尊き同胞である。

されば同胞よ。我等は生死界にありつつも、浄土の如来の眷属である。み親の尊さは、唯我等の合掌生活の上に顕れ給うが故に、全我を捧げて、国土莊嚴の歓喜に生きましよう。永遠に仏の心を心として。